

阿波の偉人
再発見！

鳥居龍蔵



その③

中国人姿で訪れた西南中国

台湾の原住民族の調査を終えた龍蔵は、その起源を探るには西南中国に住む苗（ミャオ）族の調査が不可欠と考えました。西南中国とは、長江の上流にある湖南・貴州・四川・広西・雲南省とチベット自治区のことです。この地域には、文化や言語が異なる多くの少数民族が住み、民族学研究にとって古くから注目されていた地域でした。当時、ヨーロッパの学者による研究が進んでいましたが、日本人では龍蔵が初めてこの地域の研究を行ったのです。

しかし、この地域は治安状態がとても悪く、中国政府からなかなか旅行許可が出ないほどの危険地帯でした。

龍蔵は、研究のためならと危険を顧みませんでした。彼は身を守るため、上海から船で漢口（現・武漢）へ行き、そこで中国服に着替え、中国帽に辨髪（べんぱつ）という中国人の姿で長江をさかのぼりました。湖南省の洞庭湖から貴州省に入り、高原地帯を横断し、各地で苗族の身体計測や写真撮影のほか、言語や神話、衣服や食事、住居などを調べました。

さらに、貴州省から北上し、四川省成都へ。この行程は、険しい山岳地帯を越



辨髪の鳥居龍蔵（右端）

え、最も危険と言われている彝（イ）族（当時ロロ族）の多く住む地域を通過しなければなりません。このあたりは中央政府の支配がおよばない場所でしたが、龍蔵は彝族の習俗を記録し、他の少数民族についても丹念な記録を残しています。



銅鼓（龍蔵画）

1902（明治35）年7月から翌年3月までの9カ月間、調査距離にして約4千キロに及ぶ大調査。川を船でさかのぼり、山岳地帯を馬や山駕籠（かご・輿）とし、徒歩でカメラやガラス乾板などの重機材を運びながら行った調査活動ぶりには、例えて言えば日本のインディアンズといったところでしょう。また、龍蔵はこの調査で民族楽器の銅鼓（どうこ）や蘆笙（ろしょう・笛の一種）なども持ち帰りました。特に、太鼓のようにたたいて音を出す銅鼓は、材質や文様の意味、使いみちなどの詳細な調査研究を行いました。徳島県は銅鐸が多く出土することでも有名ですが、龍蔵はこの銅鐸と銅鼓の関連についても興味を示したのです。

（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 岡山真知子）